

二〇一三年一月二六日

冴え冴えと拍手ひびく大社殿
注意報五つ伴ひ寒波来る
点滅す工事現場の冬ともし
白息のごと煙立つパン工場
春を待つ青畝風土記を読み返し
間歩址の穴明神に下萌ゆる

二〇一三年一月二五日

鎖されたるケーブルのりば山眠る
救急車はたパトカーか虎落笛
凍て返る海峡波を尖らせて
自転車のペダル重たし春嵐
初天神祈願の絵馬の鈴生りに

二〇一三年一月二四日

百選の里山を背に冬菜畑
菊炭の窯入れを待つ櫟梢
行者道指呼の木隠れ猪の罨
霧滲む始発電車のライトかな
炭窯の天辺小さき幣祀る
農具屋の殊に賑はふ初地藏
首筋を擲ちたるはなに霜雫
立ち尽くすお巡りさんの寒からん
炭主蔵よりぬつと黒き顔

二〇一三年一月二三日

足弱に杖借しくれし寒詣
火を消して炭窯黙す櫟山
下萌に傾く岨の丁目石
脳天に音突き刺さる寒の滝
軒高く櫓の積まるる行者宿

二〇一三年一月二二日

北窓を開く裏山覚むるか
寒風裡ゴールを告ぐるホイッスル

英子
こすもす
百合
さつき
よし女
菜々

有香
つくし
わかば
せいじ
ともえ

菜々
雅流
うつき
せいじ
満天
よし女
せいじ
あさこ
はく子

満天
よし子
菜々
うつき
菜々

こすもす
なつき

日脚伸ぶゆると下る二年坂
翻へりては戻りくる千鳥かな
寒明けて八十路の簾を締め直す
東風の梅紅ちよと見えてふくらみぬ
笹鳴の声はすれども姿見ず
凍て墓の裏にクルスの削り跡
美味くなれよと白菜を陽だまりに

二〇一三年一月二二日

ビリケン足裏撫でもす四温かな
着膨れの二の腕へ捲く血圧計
訪ねたる山家馳走は猪の鍋
一刷の雲黄金に寒夕焼
にらみ鯛大入りの初文楽に
凍て棚に伏せ並びたる閑伽の桶
当たりくじなる年賀状読み返す
山茶花の幾許こぼるる宮の杜
梅固しされど万朶に紅兆す
両膝に寒き閉じ込め初読経
杭に立ち虚空を睨む鷹一羽
浮棧橋ゆらゆらゆらと春隣
と見る間に竿に凍てたる濯ぎもの
寒燈を連ね釣り棧橋揺るる

二〇一三年一月二〇日

ひとつ葉を虜に手水鉢凍る
寒林を縫ひつつ消ゆる郵便車
大寒にねがふ一願寺詣
家路なる琥珀の空や日脚伸ぶ
寒夕焼見よと傾くバス窓
転びても須臾たちあがる雪遊び
おめかしの犬連れ女礼者かな

かかし
さつき
宏虎
さつき
きづな
かかし
英子

かかし
雅流
ともえ
三刀
きづな
よし女
満天
ぼんこ
はく子
なつき
さつき
菜々
英子
わかば

英子
有香
つくし
さつき
ともえ
百合
なつき

毎日句会みのる選・二〇一三年一月二八日